

會津八一全集

第七卷

會津八一全集 第七卷

定價二〇〇圓

昭和四十四年四月二十日初版
昭和五十二年六月十日再版

著作權者 會津蘭子

發行者 高梨茂

印刷者 山元正宜

發行所

中央公論社

東京都中央区京橋二―一

電話（五六一）五九二二

振替東京二―三四

編輯者例言

一、この第七卷『日記・雜纂』は、會津八一の多岐にわたる文章の「雜纂」と、第六卷に收容漏れの隨筆、ならびに遺存する日記のすべてとを收録した。

一、本卷は便宜上、『雜纂』と『日記』とに大別し、前者には、「雜纂」二十八編、「序跋・書評」二十二編、「隨筆補遺」三編、「初期文章」八編を、それぞれ第一―第四部に分ち年代別に編成し、後者には、昭和二十年以降同三十一年にいたる日記を、おなじく、年次別に從つて收載した。

一、第一部「雜纂」には、公刊、私版印行のものほか、未發表草稿をふくんでをり、その文章の性質は、多種多様であるので、「編輯後記」によつて簡單な書誌的注記を加へた。

一、第二部「序跋・書評」のなかには、道人の自著の序跋と、他人の著者の序跋を併載し、年代順に配列した。執筆ならびに發表年代未詳のものは、推定しうるものについては、該當のところに挿入したが、不明のものは各部末に附載した。ちなみに、道人自著の歌集關係の序跋、例言の類は、一括して全集第五卷に收録してある。

一、第一部以下第四部の大部分は、發表された新聞、雜誌、刊行物を底本とし、未發表のものは、ほとんど自筆稿本を底本とした。

二、第五部「日記」は、そのうちの昭和二十六年十一月の「東京の一週間」が「新潟日報」紙上に公表された以外は、すべて未發表で、日記帖、手帖ないしノート・ブックの自筆稿本を底本とした。「東京の一週間」は第六卷に收録されてゐる。

三、本卷も、各卷とおなじく、著者の執筆慣習にしたがつて、諸編を舊假名法で統一した。底本が新假名法に改められてゐる場合は、これを復元した。句讀點のない自筆草稿の場合は、讀者の便宜をはかつて、最小限にこれを附した。

四、他の事項は、卷末の「編輯後記」にゆづる。

目次

編輯者例言

第一部 雜纂

師弟合璧

日本希臘學會綱領

鹿と鰻

音樂に就いて

趣味の修養

菊の根分をしながら

銅のメダル

三 六 八 一四 一九 二六 三三

當らぬ弓	三六
趣味の向上	三九
實學論	四四
歴史家の覺悟	五九
拓本の話	六四
面影	七一
玉蟲の應用	七九
支那畫と日本南畫	八〇
「金堂壁畫保存に關して諸家に聞く」に對する回答	八二
秋艸道人會津先生還曆潤規	八四
春城先生弔辭	八七
揮毫規定	八九
實踐的	九一

漢字の認識

九四

「遊神帖」編輯要綱

一〇六

「秋艸道人近作書畫展」挨拶狀

一一一

安藤正輝氏提出學位論文審査報告書

一一二

會津記念室陳列品について

一一五

會津記念陳列室由來

一一六

「高村光太郎讀本」アンケート回答

一二三

西川寧氏紹介文章稿

一二四

第二部 序跋・書評

『奈良美術史料・推古篇』例言

一二七

『金石流光』序

一二八

『聖德太子傳私記』附言

一三八

『高僧法顯傳』序・附記

一三八

『支那明器泥像』例言

一四三

良書推薦

一四四

『渾齋近墨』序

一四五

北川桃雄著『法隆寺』書評

一四七

清水公俊著『東大寺』序

一四八

『東洋美術叢刊』總序

一五二

『遊神帖』自序

一五四

吉野君の新著

一五六

安藤更生著『正倉院小史』書評

一五九

石倉小三郎著『ゲトテと音楽』書評

一六一

辻光之助述『星より地球へ』序に代へて

一六三

阿達義雄著『川柳花街風俗』書評

一五

上村占魚著 句集『球磨』書評

一六

中村俊定著『近代俳文選』書評

一七

『亡友・山口剛作文集』序

一八

放庵の『石』を紹介す

一九

角川文庫本歌集自序

二〇

『錢瘦鐵印譜』跋文

二一

第三部 「隨筆」補遺

凝った小冊子

二二

道の意義を玩味

二三

八栗寺の鐘

二四

第四部 初期文章

蕪村の句について

一七一

夢日記の一節

一七三

説小教室の名残（翻譯）

一七五

短評集

二〇一

チヨーサーとダンテ

ゴールドスミス

近世伊太利畫人傳（翻譯）

二〇四

譯詩 二編

二〇九

二月の夕 歌人のうた

一茶研究眼の變遷

二一一

俳人一茶の生涯

二二三

第五部 日記

昭和二十年

三三九

昭和二十一年

二六九

昭和二十二年

三〇〇

昭和二十三年

三一一

昭和二十四年

三一二

遊京日記（斷簡）

三四八

昭和二十五年

三四〇

昭和二十六年

三七一

昭和二十七年

三〇三

昭和二十八年

三三四

昭和二十九年

三三八

昭和三十一年

編輯後記

四六

第一部

雜纂

師弟合璧

大正九年三
月・未發表

蕪村と几董との比較論は賴祭書屋主人これをつくせり。改めていふべきほどのこともなければ、折角の御もとめなれば一つ二つ申すべし。

蕪村の句に几董の似たるか、几董の句に蕪村の似たるかは論ずるまでもなきやうなれども、師弟といふ表面にのみ着目せずは、蕪村の作中几董の影響にて成れるものも、亦た少からぬ割合にてふくまれ居ることをしるべし。與謝野鎮幹君を罵倒せる文壇照魔鏡といふ小冊子に、鎮幹は應募の歌の作意着想を剽竊す云々とあり、それは別として趣味を同うする人々の間にはあるまじき事にはあらざるべし。

さて又いかに師弟にてもあれ、いかに同趣味にてもあれ、かほどに互に類句をのこしたるは彼等がともに藝術主義唯美主義の俳人にして、自我を高唱する人生の詩人ならざりしが爲めなり。其角は芭蕉の高弟なれども、其句はあくまでも其角流にして芭蕉に似ざること遠し。これ芭蕉は己の句を詠じ、其角は亦た己の句を詠じたるが爲めなり。一茶は其師に似ざるを悔いず、其弟子の己に似るを好まず、其句つねに個性と眞情とを流露して長く獨歩す。蕪村几董の技巧と趣味とはまさしく賴祭書屋主人等の激賞するが如く、俳界のみとはいはずひろき意味に於ける文學史上

に珍とすべきものたるは争ふべからざれども、それをのみ偏重して芭蕉其角を抑へ一茶を遣るゝが如きは、論なきを得ざるところなり。しかるに今の世の俳家は、蕪村あるをしり、几童あるをしりしは、實に頼祭書屋主人等の紹介によることなれば、紹介の當初より少しかひかぶり居る如き風あり。所謂日本派俳句の末路今日の如きを致せるも、亦たこゝに關すること大なりといふべし。

几童用うるところの語蕪村と共通なるもの多きが如く、其角集中の特殊の語にして蕪村の爲めに襲用せられしもの亦た少からず。知らざる人は蕪村の造語の天才を賞揚するさへあり。しらずや五元集は實に蕪村が愛誦のものなることを。蕪村口をひらけば五子を説き、就中其角を揚ぐ。其角集中の句と蕪村の句と兩々對比すること几童に於けるが如くせば、亦た別様の趣味もあるべけれども、いまは其わづらひを避くべし。頼祭書屋主人ほどの博覽にて此處に氣つかざることあるべからず。氣つかざるが如くものして英雄の人をあざむきしか。

さて又几童蕪村の相似たるや、時には一にして二に、二にして一なるが如く、いづれをいづれともさだめがたきが如く、ことに作者の態度にていよく近けばいよく其似たるを覺ゆれども、几童の蕪村に及ばざるは論なし。其及ばざるは機根骨力にあり、天賦にあり。几童を學ぶものは學びてやまざれば几童に到るべし。されども蕪村に到らむことは思ひもよらぬことなり。

蕪村が其角を愛したるはすでにいへり。几童また其筆蹟をみても同じく其角に傾倒のこゝろあ